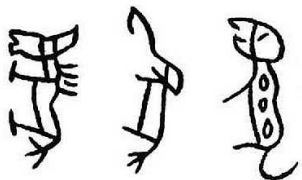




魚住和晃編著「マンガ・書の歴史、殷～唐」講談社 2004年5月27日刊を読む

## マンガ・書の歴史、殷～唐

1. (1)書は読書人の芸術であるとか、書斎から生まれた芸術であるとかいわれます。  
 (2)私はさらにこれを、書簡しょかんから生まれた芸術ではないかとも考えています。  
 (3)今日では碑ひに刻こくされた文字のほか、甲骨文こうこつぶん、竹簡ちくかん、帛書はくしょの発掘によって、書作の対象となる文字はきわめて広範になっていますが、書簡から生まれた芸術とは、それらよりはるかに近代的な意味あいをもつものです。
 
2. (1)本書で述べたとおり、晋代しんになって紙が発達し普及したことが、士大夫しだいふに書簡せきとく(尺牘)を交わす楽しみを与えました。  
 (2)届けられた書簡の中の、すぐれた文章に心を動かし、すぐれた書法に見入ることが、彼らにとってかけがえのない喜びであったのです。
 
3. (1)唐の太宗たいそうは二千余通もの王羲之おうぎしの尺牘を集めたとされます。  
 (2)書することを造形として意識し、他者にそれを示すことを芸術というならば、王羲之は書の芸術意識を明確にさせた最初の人であり、その意味において彼を書聖しょせいと位置づけることもうなずけます。
 
4. (1)王羲之がさかんに尺牘を友人に送るようになるのは会稽かいけいに隠棲いんせいしてからのことで、没するまでのほんの数年間でした。その間に、なんとたくさんの尺牘を書いたことでしょう。  
 (2)それ自体が日々の生活であったのかもしれませんが。  
 (3)この意識は現代人のメール交換と、さして変わりはないのです。  
 (4)ただし、尺牘また書簡の場合、文章、書法ともに高い素養を示したものではなくてはかっこう悪いというプレッシャーがあります。  
 (5)つまり、書が運命的に書斎の香りを必要とするものであり、書する人が書の文化に対する知識と認識を欠くわけにいかない理由がそこにあるのです。
 